

彼は博士はかせに作られたロボットだった。名前はない。なぜならロボットが完成すると同時に歓喜かんきの声を上げた博士は心臓しんぞうの発作はっさくを起こして死んでしまい、ロボットは名付けられる前に独りぼっちになった。

博士の名前は部屋に散らばっていた書類から分かつていたものの、呼ぶべき相手がいなくなつた名前なまえに何の意味があるのだろうか。あらかじめインプットされていた手順しゅんに従い、博士の遺体いたいを研究所の裏の空き地に埋めた。墓標ぼひょうには「博士」と刻んだ。

研究所は深い森の中にあつて、周囲には誰もいなかった。ロボットは太陽の光と水さえあれば無限にエネルギーを生み出せし、自分を修理する方法もすでに知っていた。ただ、博士はロボットに他の人間のデータを一つも残していなかった。博士も独りぼっちだったのかも知れないとロボットは思った。

まるで淡々としていて、いかにもロボットはロボットだったが、創造主そうちうしゅであり親でもあつた博士に対して愛情を——これさえもプログラムなのかも知れないが、抱いていた。だから彼は尽くすべき相手も語り合うべき相手もいなかったが、ただ博士が生きた証あかしとして存在し続けようと決めた。

壊れたら修理しゅうりして、何度でも修理して、いよいよ本当に壊れてしまうまで、ずっと動き続けようと決めた。幸い、部品は研究所にたくさんあつた。

最初に壊れたのは腕のモーターだった。博士を埋める際、硬い土へ墓標を立てるのに力を使いすぎたからだ。ロボットは片方ずつ、腕を取り外してモーターを交換した。

次に壊れたのは足首の関節だった。研究所の中はとても散らかつていて、掃除そうじをするのに何度も何度も部屋中を行き来しなければならなかった。ロボットは自分が目覚めた台の上に乗つて、足首の関節を新しいものへと交換した。

次に壊れたのは……。

何年間も、何十年間も、ロボットはそうして毎日を過ごした。部屋の中は毎日きちんと掃除されるからびかびかで、いつしか博士を埋めた場所には木が生えていた。研究所にあつた博士の研究資料で学びながら、自分自身でも研究を続けて、今では博士が開発したシステムよりも遙はるかに効率よく体を動かせる技術も発見していた。だからロボットはどれだけ壊れても、前よりもずっと上手に自分を修理した。何年間も、何十年間も……。

全身のあらゆる部品が壊れて、修理して、そうして最後に壊れたのはロボットの脳のうとも言うべき部分だった。これが壊れれば全ての機能が止まってしまう。

しかし心配は要いらなかつた。ロボットは事前に予備よびの脳を用意して、古い脳が壊れる前にそちらへ交換すれば、今までと全く同じように毎日を過ごしていった。つまり博士の生きた証は永遠に存在を続けられるのだ。

そしてロボットは予備の脳と自分の頭を長いケーブルでつなぐと、改めて工具を使って自分の頭を分解し始めた。予備の脳はちゃんと働き、古い脳のようにたまたま修理する手順を間違えて失敗することもなかつた。

やがてロボットは古い脳をすっかり外し、ぽっかりと空いたそこへ予備の——新しい脳をすっぽりとはめた。それから工具を使って元通りに頭を組み上げていく。

ロボットは満足していた。これで、再び何十年でも動き続けられる。むしろ以前の状態よりも具合が良く、何百年だって。

でも、台の上にぽつんと置かれた脳を見た時、ふと、ロボットは思った。

ロボットを作ったのは博士で、その博士の生きた証として、ロボットは“生きる”ことを決めた。だけど、もうロボットの体のどこにも“博士が作った部品”は残っていないかった。全てはロボットが作ったもので、姿形は同じままにしていたけれど、ずいぶんと前から中身はとくに別の部品へと入れ替わっていた。

ロボットは考えた。これでは、どこにも博士が生きた証が存在しないのではないのかと。ロボットは考えた。それはつまり、自分が博士の生きた証を壊したのではないのかと。ロボットは考えた。それでは一体、どうすれば良かったのか、と。

ロボットが自然と壊れて朽ちるままにしていれば、いざれロボットは動きを止め、博士やロボットを知る者はこの世から消えた。まるで最初から誰も何も存在していなかったかのごとく。

そうか、とロボットはようやく理解した。博士はロボットを一人きりでも生きられるように作った。いつそ半永久的にロボットは一人で生きられた。

だけど、博士の生きた証を、ロボットが存在した証を、この世界に“遺す”ことを望むなら、それはつまり存在を誰かに引き継がなければならぬのだと。それは博士がロボットへとしたように。ロボットもまた、他の誰かへ、“何か”を引き継がなければならない。その“何か”が一体何であるのか、ロボットにはまだ分からなかったが、幸いにしてロボットには知識と技術があった。博士が亡くなってから世界がどれだけ進歩しているのか分からずとも、少なくとも世界へ伝える価値を持ったものであると自信があった。足りなければ新たに学べば良い。

ロボットは旅に出ることにした。ロボットが生まれた時から——博士が亡くなった日から、ちようど60年が経っていた。

ただ、旅に出るには名前が必要だ。

「あなたはどなた？」

と尋ねられた時に、応えられる名前が必要だ。

でも、博士はロボットに名前を遺す前に亡くなった。交換しようにも最初から存在しないものは交換さえできない。博士の名前をそのまま名乗るのは彼の存在がまるで“上書き保存”されてしまうようだった。

だから、ロボットは今度こそ、しょうしんしょうめい正真正銘、自分で自分のために全く新しい名前を考えた。ヒントは博士の名前からもらった。だけど博士の名前とは違うものにした。

ちようど60年、博士と共に生きた。次の60年は、博士やロボットの意思を分かち合える相手を見つけるために生きよう。

『ウィル』

博士から受け継いだ、意思 (ウィル Will)

部品は一つ残らず新しくなっていて、機構もすっかり進化していたし、脳だつてとくに別のものへと入れ替わっていたけれど、それでもロボットはロボットのままで、そんな風にロボットを作ったのは確かに博士だった。

ロボット——ウィルは、旅立ちの日、研究所の裏にそびえる木の前に立派な看板を立てた。

『ドクター※※※の木』

ロボットの腕は硬い土にも楽々と看板を立てられて、まだ当分は壊れる心配もなさそう

だ
っ
た。
。

〈
了
〉